

平成17年度教師海外研修参加者授業実践報告（スリランカ編）

長澤 直子教諭（八王子市立高倉小学校）

三島 誠教諭（八王子市立みなみ野小学校）

中楯 浩太教諭（町田市立金井小学校）

源田 洋二郎教諭（町田市立南中学校）

井田 久雄教諭（日野市立三沢中学校）

志和 久恵教諭（玉川学園中学部）

高橋 勝也教諭（東京都立拝島高等学校）

高島 みゆき教諭（東京都立一橋高等学校）

（注）高島みゆき教諭はファシリテータとして参加していただきました。

平成17年度 教師海外研修(派遣国:スリランカ民主主義人民共和国)

実践報告書

1. タイトル 世界の国を知ろう

2. 八王子市立高倉小学校 教諭 長澤 直子 担当教科 算数

3. 実践教科 総合的な学習の時間 時間数 10時間

4. 対象学年 6年 対象人数 50人

5. カリキュラム案

(1)実践の目的

- スリランカのさまざまな文化について写真やビデオを中心に知り、異国の異文化を理解することで、日本の文化を知ったり、理解したりすること。
- スリランカの子どもたちの生活や学校の様子などを知り、共生・共存できる社会の実現に向けて、自分なりの考えをもつ。
- 毎日の生活の中に、自分の考えを生かしていく。

(2) 授業の構成案

時限・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
<p>1. 2 「スリランカの概要を知る。」 ねらい: 気候風土・文化・習慣などについて日本との相違点を知る。</p>	<p>(1) 世界地図やスリランカの地図をもとに気候や周りの国々について知る。 (2) コロンボやキャンディなどの町の様子を写真やビデオで見ながら、日本の様子との相違点をメモする。 (3) カレーを中心とした食事や豊富なくだものなど日本の食文化と比べてメモする。日本との相違点をワークシートに書く。</p>	<p>(1) 世界地図、スリランカの地図 (2) 写真・ビデオ (3) カレーの香辛料 ワークシート 児童の感想 ・くだものやカレー等を見て南国という感じがした。 ・仏教という宗教を大切にしていた。</p>
<p>3. 4 「スリランカの学校」 ねらい: 学校の様子・児童の学習状況・内容・関心態度などについて自分達の学校生活との相違点を考える。</p>	<p>(1) L T T E 地域の学校の写真を見て気付いたことを話し合う。 (2) コロンボなどの学校の様子を写真やビデオで見て、自分達の学校生活との相違点をメモする。</p>	<p>(1) 写真 (2) 写真・ビデオ ワークシート 児童の感想 ・ぼくたちは贅沢だと思った。もっと物を大事にしようと思う。 ・電気がついていなかったり、トイレが少なかったりして不便なところがあったけど楽しそうに勉強していた。</p>

<p>5. 6 「紅茶・エステートについて」 ねらい： スリランカの紅茶産業について知り、普段飲んでいる紅茶について認識を新たにするとともに、エステートの人々の暮らしについて知る。</p>	<p>(1) 紅茶について、その原料や作り方について知る。 (2) エステートでの仕事や働く人々の様子を写真やビデオで知る。 (3) 紅茶を飲みながら、自分の考えたことを書く。</p>	<p>(1) 茶葉の写真、紅茶 (2) 写真・ビデオ (3) ダストワン紅茶 ワークシート 児童の感想 ・紅茶がこういう風に作られていたことを初めて知った。 ・スリランカの紅茶はおいしかった。 ・貧しい生活をしていると思った。</p>
<p>7. 8 「津波」 ねらい： 2004年12月に受けた津波被災地について知り、その生き方を学ぶ。</p>	<p>(1) 津波について簡単に事実をふり返る。 (2) 津波被災地の写真を見て気付いたこと感じたことをメモする。 (3) 被災地の児童会の様子や暮らす人々の様子を見て感じたことをメモする。</p>	<p>(1) 写真・ビデオ ワークシート 児童の感想 ・津波から何ヶ月もたっているのにまだひどい状態だと思った。 ・子供会の方は頑張っていた。</p>

<p>9. 10 「自分の生き方をふり返る」 ねらい： スリランカの国の様子をまとめ、自分なりの考えをもったり、これからの生き方について考えたりする。</p>	<p>(1) 4つの内容をふり返り、感じたことや考えたことを話し合う。 (2) 情報交換し、不足の情報を補い合う。 (3) 今の生活やこれからの自分の生き方について考えたことをまとめ、発表する。</p>	<p>(1) 4つの内容のワークシート 発表用原稿 児童の感想</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 自分達と違う生活や考え方があつたことを知つた。 ・ ぼくたちの生活にもつと感謝したいと思つた。 ・ 自分達には何ができるかを考えなくてはと思つた。
---	---	---

平成17年度 教師海外研修実践報告書

派遣国 スリランカ民主社会主義共和国
学校名 八王子市立みなみ野小学校
氏名 三島 誠

1. タイトル 「いろいろな国の人と仲良くなろう」
2. 実践教科 総合的な学習 4時間扱い
3. 対象学年 小学校5年生 4学級129人（学級単位で授業を実施）

4. カリキュラム案

(1) 児童の実態

小学校高学年の子どもたちは、社会的な認識が身近な生活の場から次第に抽象的な社会の仕組みまで広がりつつある時期である。知的な発達段階からみて、日本とは違う国の風土や生活を学習するには良い時期である。日本とスリランカの様子を対比しながら意欲的に学習に取り組むことができる。その反面、精神的には自分の世界を作り、狭い人間関係の中で他の価値観を受け入れにくくなる傾向も出てくる。そのような実態から、特に共感的な方向に子どもたちの意識を向けさせたい。

(2) 実践の目的

- ・スリランカの国土や生活の様子を知り、自分たちと違う生活や価値観があることを理解する。
- ・国が違っても、同じ人間として共通する願いを見つけ共感する。
- ・国や文化、考え方など、自分とは違う人に広く関心をもち自分から働きかけようとする気持ちをもつ。

(3) 授業の構成案

時限・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
第1時 「スリランカは どんな国だろう」 スリランカの国の概要 を知る。	地図、図書、インターネットなどを 活用してスリランカの様子を調べる。 ・位置 ・気候 ・国旗 ・産業 など ☆調べたことを日本の様子と比較し、似てい るところや違うところを意識させ、どんな 国なのか自分なりのイメージをもたせる。	世界地図 地理事典 パソコン ワーク シート1

「いろいろな国の人と仲良くなろう」

5 - 名前

1. スリランカはどんな国だろう？

わかったことを書いてみよう

スリランカはどんな国だと思いますか？

「いろいろな国の人と仲良くなろう」

5 - 名前

2. スリランカと日本を比べてみよう

日本とちがうところ

--

日本とにているところ

--

スリランカはどんな国だと思いますか？

--

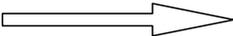
「いろいろな国の人と仲良くなろう」

5 - 名前

3. スリランカの中の日本

日本と関係がある物やことがら  どんなところが？

--	--

人のつながり  どんなところが？

--	--

スリランカと日本の関係をどう思いますか？

--

「いろいろな国の人と仲良くなろう」

5 — 名前

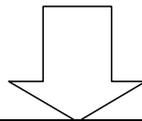
4. 他の国の人と仲良くしよう

日本車のイメージは？

日本人のイメージは？

他の国の人と仲良くするためにはどうすればいいと思いますか？

今の自分にできることは？



[総合]

【国際理解教育 学習計画】

目的 スリランカの文化や生活の様子を知り、世界には、日本とは異なる考え方があることを理解すると同時に、自国の文化への理解を深める。

また、スリランカの人々や海外で活躍する日本人の生き方から、自分の生き方を振り返り、これからの生活に活かしていく。

ねらい

全22時間

時間・テーマ・ねらい	活動方法・内容	使用教材
1時限 スリランカで暮らす人々の生活や文化を知り、興味をもつ。	(1) スリランカについてもっているイメージを話し合う。 (2) スライドを見ながら、クイズ形式でスリランカの人々の生活について、想像し、話し合う。	・地図帳 ・スリランカの地図 ・スリランカの写真 →【部屋の四隅】
2時限 スリランカの生活の一端を体験し、五感で外国の文化を感じる。	(1) スリランカ紅茶を飲み、自国との結びつきを考える。 (2) スリランカの衣装である、サリーとサロマを実際に着て、自国の服の着心地と比較する。 (3) 【フォトランゲージ】、【ものランゲージ】のアクティビティーを行ない、スリランカの文化への理解を深める。	・セイロン紅茶 ・サリー、サロマ ・アクセサリー（シール） ・スリランカの教科書、お面、お金、蚊取り線香、新聞、Tシャツ、洗濯石けん、
3時限 自分たちの学校との共通点と相違点を探しながら、スリランカの学校の様子を知る。	(1) ビデオで、スリランカの学校の様子を視聴する。 (2) 自分たちの学校との共通点と相違点について話し合う。	・スリランカの学校のビデオ ・ワークシート
4時限 貧困地区、津波被災地、茶畑での生活を知り、開発途上国としてのスリランカを知り、“本当の豊かさ”について考える。	(1) 物質的に豊かではない地区に住む人々の生活をビデオで視聴し、開発途上国の現状を知る。 (2) “本当の豊かさ”とは何かということについて、考え、話し合う。	・開発途上国の様子が分かるビデオ。 ・ワークシート
5～7時限 海外で活躍する日本人について知り、その	(1) 海外で活躍する日本人の働きぶりについて、ビデオを視聴する。 (2) 疑問や感想を出し合い、自分たち	・JICA やケア・ケアパンの人々のビデオ。

活動内容や日本の国際援助について調べ、国際協力に関して自分なりの考えをもつ。	の課題を見つけ出す。 (3) 課題について、様々な資料を用いて追究していく。	・ランキングワークシート
8時限 海外で活躍する日本人をゲストティーチャーとして招き、調べきれなかったことを質問し、理解を深める。また、国際協力やそのような人々の生き方について考える。	(1) ゲストティーチャーを招き、調べきれなかったことについて、質問する。 (2) 国際協力について調べたことを発表し、ゲストティーチャーからコメントをしてもらう。 (3) 海外で活躍する人々の生き方について、考えたことを発表する。	
9～10時限 ゲストティーチャーに聴いて新たに分かったことをまとめる。実際にスリランカの人々と交流するために、自分たちに(日本人として)できることは何かを考える。	(1) 新たに分かったことをディスプレイ型ポートフォリオにまとめていく。 (2) スリランカの人との交流に際して、自分たちには何ができるのかをブレインストーミングで意見を出し合い、KJ法でまとめていく。	
11～15時限 課題を追究する。	(1) 学級ごと、グループごとに課題を追究する。	・模造紙 ・画用紙 ・色画用紙
16～17時限 スリランカの人びとと、日本のことを紹介する。	(1) 学級(学年)(グループ)ごとに、自分たちの追究してきたことを発表する。	
18～19時限 これまでの学習を通して、感じたこと、考えたことをまとめ、全体で意見交換をする。	(1) 学習を通して考えたこと、感じたことを自分の言葉でまとめ、意見交換する。	
20～22時限 スリランカカレーを作り、異国文化の食を味わう。	・未定	

【教師海外研修で感じたこと】

今回の研修では、私の全感覚を通して、溢れるほど刺激を受けた。目にし、耳にする（五感で感じられるもの）全てのもものが新鮮で、人、物、生活、町並み、景色、気候、雰囲気など、日本とはまた違った世界が確かにそこには存在していた。

教師である前に一人の人間として最も強く感じたことは、スリランカの人々の明るい笑顔と海外で働く日本人の圧倒的なパワーだった。そんな彼らに共通していることは、「生きるエネルギー」に満ち溢れているということだ。そしてその「生きるエネルギー」に触れると、こちらまでビンビンエネルギーが伝わり、元気になってくる。

これまで私は、「他人のやる気に火を付ける」をモットーに生きてきたところがある。今回はまさに、受け手の側としてそれを実感する結果となった。

そこで、一人の人間として私が実践したいことは、「生きるエネルギー伝導者」となるべく、日々生活し、実践していくということだ。

教師としては、「生きるエネルギー」を授業と学校生活全般を通して子どもたちに伝えていくことだ。

ここでもう少し「生きるエネルギー」について考察していきたい。研修後のJICA八王子での報告会の際、職員の方からこのような質問を受けた。

「日本の子どもも卒業式などでは将来の夢などをしっかりともち、それを立派に語り、生きる意欲があるように感じるのです。また、何か具体的に、生きるエネルギーを感じたというようなエピソードはありませんか？（さらに、どのような授業で子どもに生きる意欲を伝えていこうと考えていますか？）」といった質問だ。この質問を契機に、スリランカで感じた自分の感覚と向き合い、より深く思索していく必要があると痛感した。以下の4つの視点で進めていく。

- 1, 私は具体的にどこに生きるエネルギーを感じたのか。
- 2, また、生きるエネルギーの源は何なのか。
- 3, どうして子どもに「生きるエネルギー」が必要なのか。
- 4, どのようにしたら「生きるエネルギー」を伝え、育てることができるのか。

1, 私は具体的にどこに生きるエネルギーを感じたのか。

ここでは、エネルギーという言葉にまとめているが、詳しく見ていくとそれぞれ異なる場面が重なり合い、全体としてそのように感じたのではないだろうか。

まず町中である。道路は予想していたよりもずっと車が多く、苦しくなるほどの排気ガスとけたたましいクラクションが響き渡っていた。これをただ、交通マナーの悪い運転手が、規制されていない車に乗り、常に苛立ちクラクションを鳴らしているだけだと結論づけたのでは、感覚としてはしっくりこないのだ。

人々はただボーと運転するのではなく、ただひたすら目的地に向かおうと懸命な様子に見て取れた。あのクラクションも怒って威嚇的に鳴らしているというよりも、言葉のかわりとして、車同士が軽快に会話を交わしているようにも思えてくるのだ。そんな様子から、**人々の心の高ぶりや熱**のようなものを感じた。

次に、市場である。品物が路上に剥き出しに、しかも雑多に並べられていた。生臭い匂いやカレーや果物の匂いが入り交じった路地には、人が溢れ、店内では年季の入った包丁を握った店員が魚や肉をバキバキとたたき割っていく。その肉は、強烈な匂いと存在感を放ち、店頭にぶら下げられている。その匂いにつられてカラスが鳴き声をあげながら、群がってくる。

また、上半身裸になって大声を上げている人もいれば、ボロボロの格好で路地に寝転がっている人もいる。カメラを向けると、睨みのぞき込んでくる人もいれば、笑顔で声をかけてくる人もいる。

そこからは、**人々が生活している活気**が感じられた。

訪れた小学校では、ムツとするほどの暑さで黙っていても汗が全身から流れてくるほどだった。電気も付けず、真っ暗な教室の中では、子どもたちが先生の熱のこもった指導を、真剣な眼差しで聴き入っている。その真剣さの中にある眼差しの美しさに思わず見入ってしまうほどだった。

授業以外では、少し恥ずかしそうにしながらも、キラキラ輝いた眼差しでワーと私たちの方へ集まってくる。「この訪問者は何かしてくれるんじゃないか」と期待しているのか、外国人が物珍しいのか、歓迎してくれているのかは定かではないが、元気な命の固まりが怒濤のように迫ってくる感覚だった。

ここでは、暑いとも疲れたとも言わずに、ただひたすらに授業に取り組む**真剣な姿**と屈託のない笑顔と、**元気いっぱい**に跳びはねる**躍動感**を感じた。

津波被災地と貧困地区と茶畑のエステートの人々とを一括りにすることはできないが、共通していることは、日本とは比べものにならないほど物質的には不足しているということだ。しかし、そんな物質的な不足など吹き飛ばすような笑顔がそこには

あった。私たちが行く先々で、家族が寄り添い笑顔で出迎えてくれる光景を眼にする。

貧困地区や紅茶のエステートを訪れる際、私の心の中には戸惑いがあった。それは、奢りからくる心の動きだったのかもしれない。つまり、経済的に発展し、豊かな国日本からやってきて、貧しい国のさらにその底辺を視察する。私のような人間が足を踏み入れてもいいのだろうか？彼らはどう思うのだろうか？決して受け入れられないのではないだろうか。

しかしそれは杞憂に終わった。どこの人々も皆温かく、私たちを笑顔で迎え入れてくれる。恐る恐る「一緒に写真を撮ろう」と声をかけると、喜んで受け入れてくれるのだった。そんな彼らの笑顔と優しさ、温かさに触れ、私の奢りはいつの間にか消えていた。もちろん戸惑いなどなくなっていた。

私はここで、人々の訪問者に対する温かさと家族の強い結びつきと近隣の仲間との交流を感じた。

そして、今回の研修で忘れてはならないのが、海外で活躍する日本人の存在である。JICAスリランカで働く植嶋所長、坂田次長、村松調整員、通訳の西村さん、青年協力隊の青年たち、シニア隊員の方々、大隅教授、NGOの　　さんすべての人々に魅力とパワーを感じた。同じ日本人として誇りにさえ感じたほどだ。しかしそれと同時に、彼らには負けてられないという気持ちが奮えたったのも正直な気持ちだ。

植嶋所長は、平和な世界の構築についてあつい信念を持ち行動されている。世界の平和を口先だけで唱えるのではなく、「世界の現状を見てしまったからには、看過できない」という動機から、世界の平和に向けて真剣に、真っ直ぐに活動しておられるのだ。しかし決して偉ぶるのではなく、津波被災地区では一緒になって現地の子どもたちに向けて「蛙の合唱」を歌ってくれたのだ。口先だけではない、所長の人柄がここからも伺える。

調整員の村松さんは、現地生活5年というだけあり、現地の人々とのコミュニケーションは堂々としたもので、しかも何から何まで知り尽くしているといった様子であった。1質問すると即座に10は返ってくるというように、頭の回転の鋭さにも感心するばかりであった。

また、「黒板プロジェクト」の活動をしている大隅教授は、厳しい論調の中にも、スリランカが少しでも良くなって欲しいという熱い情熱を持っていることが伝わってくる。「子どもたちに、これだけは誰にも負けないという自信をつけさせてあげて欲しい！」と私の目を見つめて語られた一言は忘れることができない。

さらには、海外で一人きりの生活を強いられているはずの協力隊員たちの底抜けに明るいあの様子は、見ていて心底強い人間のように私には映った。

彼らのあの底抜けのパワーの源に、強い信念が隠されているのがわかった。

《人々の心の高ぶりや熱、生活している活気、真剣な姿と屈託のない笑顔、元気いっぱいに跳びはねる躍動感、訪問者に対する温かさ、家族の強い結びつき、近隣の仲

間との交流、底抜けの明るさと強い信念》言葉にするとこのような刺激を五感を通して感じたのだ。そしてそれが全体として、「生きるエネルギー」なのだと表現できる。

つまり、個別に一つ一つ「生きるエネルギー」を感じたエピソードがあるわけではない。これら個別の経験を通して、「生きるエネルギー」を彼らから与えられていたのだ。それはまるで、熱いものに触れ「熱い！」と表面で感じるのではなく、気が付くと自分自身が中身から熱くさせられていたようなものだ。＝つまり《低温火傷状態》なのだ。

2、生きるエネルギーの源は何なのか。

「生きるエネルギー」の正体は分かった。では、その源は一体どこからくるのであろうか。それぞれ事象が異なるため、これを突き止めることはそう容易なことではない。しかし、これまでの私の経験から言えることは、

《生きるエネルギーは人とのかかわりの中で生まれてくる》のではないかということだ。

これまで述べてきた場面にはすべて人がかかわっている。そしてその人々からは、様々な刺激を受けた。

まずは、スリランカの人々とのかかわりから考えていきたい。

彼らは皆一様に明るい。津波被災地区でもエステートの長屋での生活を強いられている彼らも、こちらが笑顔で手を振ると必ず笑顔で手を振り返してくれる。彼らは、物質的には決して豊かではない。しかし、だからこそ、物質と笑顔とは決して比例しないということが実感としてよく分かった。

彼らの明るさと笑顔は、生活の中から自然と生まれてくるものなのではないだろうか。人々とかかわり合いながら生きていく生活。大勢の仲間がいる安心感のある生活。あくせくすることなくのんびりと過ごしている生活。そんな生活の中から彼らのエネルギーが生まれてくるのではないだろうか。(彼らの笑顔や明るさの源は、実際のところは分からない。朝から晩まで働いている人もいれば、出稼ぎのため親のいない子もいる。そう考えるとやはり源を突き止めることは難しい。)

次に、海外で働く日本人とのかかわりから考えていきたい。

特に海外で活躍する日本人たちには、きっと素晴らしい能力を持っているに違いない。しかし、その能力以上に、心の底から湧き出る彼らの情熱にこちらの心が揺さぶられた。その内なる情熱は、決して内部でくすぶることなく行動力として世の中に役立ち発散されていた。

彼らに聴くときっと、「〇〇のために」やっているといった偉そうなものではない、と答えるだろう。彼らは驕り高ぶった気持ちで、誰かのために何かをやっているのではきっとない。純粹に、この世界を今よりもよくしたい、この国を今よりもよくした

い、そのためにこんな自分が何かの役に立つのならば、生かしてみたいという気持ちが心の奥底にあったのではないだろうか。しかし、これさえも彼らには否定されてしまうかもしれない。「そんな大層なものではない。」と。

元青年協力隊で今回ファシリテーターとして随行して下さった高島さんは、「協力隊員は、自分のためにある。」と断言しておられた。それは、様々な苦悩や葛藤を乗り越えた者のみを知り得る高見の境地なのかもしれない。またそれは、広い世界の中のたった一人の人間として、自分の能力の限界を知ることができたという偉大なる開眼なのかもしれない。

「情けは人のためならず」とはよく言ったものだ。誰かのために何かをするのではなく、いつかは巡り巡って返ってくる自分のために人に手助けをするものだという意味だ。しかしこれは、ほとんどの格言同様、これ自体には何の力も持たない。格言とは、様々な経験を含み込んだ結果にすぎないのだ。その証拠に、この言葉(=格言=結果)を知って、自分のために人に情けをかけようとする人間が本当にいるだろうか。そうではなく、人のためと思って手助けをしているうちに、その過程で、自分の無力さを痛感したりその人に喜んでもらえたという満足感を味わったりするのだと考える。

つまり、結果として自分のためでもあったのだと後になって気づくのである。それが格言の持つ本当の意味なのである。そしてそれに気づかせてくれるのが、協力隊の仕事であったり、教師の仕事であったりするのだ。

山の上に登っている者の発言を、遙か下からではなかなか聴き取れないように、われわれが彼らの発言をそのまま単純に受け取っては大きな勘違いをしてしまうことになる。海外で力強く活躍する彼らの心を真に理解するためには、同じような経験をして初めて可能になるのではないだろうか。同じ土俵にたつて初めて意見を交わすことができるのではないだろうか。

エネルギーの源を突き止めることは今のところ断定できない。しかし、私がスリランカで感じたことは、海外で誰かのために働いている人たちが、自分の力を痛感し、自分を成長させてくれたという点では、自分のためであったのかもしれないが、その内側には熱い情熱を確かに持っているということだ。そしてその情熱と頑張りは、私たちにもエネルギーを与えるということだ。

また、スリランカの人々の明るい笑顔と元気な生活は、私たちにエネルギーを与えてくれたということだ。

3、どうして子どもに「生きるエネルギー」が必要なのか。

「人のもつエネルギーは伝播する。」スリランカに行ってそれを実感してきた。

今私は教師として、子どもたちと向き合える立場にいる。そこで感じる問題は、やらされていると感じながら嫌々生活をしている場面があまりにも多いのではないか、

ということだ。

またそれとは逆に、やらされていることを嫌とも思わず（疑問にも思わず）、取り敢えずやるといった様子もよく見られる。そこには「よしやってやろう」という意志が感じられないのだ。

それは授業の一端からもうかがえる。授業中に、必要なものを忘れたk君、I君という児童がいた。こちらは、授業開始から、彼らが忘れていることに気が付いていたが、敢えてそのことには触れない。するとどうだろう、彼らは、何をするわけでもなく、ただボーと過ごすのだ。こちらに声を掛けられるまでである。周りは、(仮に)昨日やってきた宿題の丸付けをしている中、彼らは悪そうな仕種をみせるわけでもなく、ただ席に座っていたのである。(ただ、「何もしないことは一番良くない。自分で考えて何かをきなさい」と常に指導されているだけに、彼らは声を掛けられるというより、叱られることになるのだが。)

また、ある場面で、ある児童が、選択を迫られる場面があった。ある児童は、「先生選んで！」と選択、決断を完全に大人に託し、またある児童は、「どっちでもいい。」とあって、いっこうに決断できないのだ。

さらに、これは現代の子どもたちの口癖にもなっており、教室でも毎日聞かない日はない「ムリ」「めんどくさい」といった言葉は、言葉の世界だけにとどまらず、その児童の精神性、身体性にまで強く影響を及ぼしていると思われる。

だからこそ教師は、体験的な活動を取り入れた、主体的に取り組める授業を設計しなければならないと言われている。しかし、これは、それ以前の問題ではなかろうか。学ぶ意欲の前に、まずは生きるエネルギーが欠如しているのではなのではなかろうか。そう疑ってしまうような出来事を日々目にする。彼らの多くは、ただ何となく生きているのである。

ただ、生きるエネルギーの根本を探っていくと、そこには、「自分は無条件に愛されている。」「自分はここにいてもいいんだ。」「喜びを一緒に共有し、悲しみを分かってくれる誰かがいる。」「自分は誰かに必要とされている。」といった、心理的な安心感があるのではないかと考えられる。

しかしながら、一教師として学校の中だけでそれを充足させるには限界がある、とも痛切に感じているところである。

ここまで考察してきて、では、「どうして子どもたちに生きるエネルギーが必要であるのか」ということの結論を述べる。

それは、私たちが、人とのかかわりの中で生きていかざるを得ない存在であるからだ。「人間は関係性の動物」と言われている。私たちはその関係性を自らの考える力と、動ける身体とで、創造していかなくてはならないのだ。自分の生きるエネルギーと相手の生きるエネルギーを交換しながら、関係性を築き、それら多くの関係

性を創る過程で私たちは成長・成熟していく。また、関係性から、考える力と動ける身体も育っていく。逆に、考える力と動ける身体が、良い関係性を創りあげていくともいえる。

特に現代の社会環境では、人と人とのかかわりが希薄になってきている。だからこそ、今の子どもたちには、交換可能な自分の生きるエネルギーが不可欠なのである。

では、生きるエネルギーを奪っていった要因はどこにあるのだろうか。社会的な人間関係の希薄化が大きな要因にあげられるだろう。

ただ、教師として、看過できない要因は、子どもの決断を大人や教師が奪い去ってしまったことにあるのではないかと考えている。「考えない習慣は、考えられない習慣を生み、考えられない頭を作り出す。」という言葉を連想するが、決断させてもらえない習慣は、決断しない習慣となり、決断できない人間を作り出す、と言い換えられないだろうか。

親が言うから、先生が言うから、みんながやるから仕方なくやるという彼らの言動は、彼らが無責任で受け身な人間にしてしまっているのではないか。やらされるのでは、意欲は決してでてこない。やらされているとっては、主体的な人間になりようがない。

また、今の子どもたちを見ていて、やらされているという意識、誰かに言われたから、みんなもやっているから仕方なくやるという生き方が、責任感の欠如に結びついていると思わざるを得ない。子どもに選択する余地を与え、十分に考える時間を確保し（現実的には難しいことは重々承知）、自ら決断するという場面を創り、その過程を習慣づけることができたなら、子どもたちの生きるエネルギーは増していくのではないだろうか。その経験から、失敗の大切さや責任がどのようなものであるのかを学んでいくはずである。

その他の要因としては、大人が、子どもたちに十分に自信をつけさせてあげられなかったと言うことも大きい。全く自分に自信のない者で、生きるエネルギーに満ちあふれているという人物を私はこれまで見たことがない。

さらには、大人が尊敬され、憧れられる存在ではなくなってきたということも関係しているはずである。大人になっても夢をもち、エネルギーをもった人物に出会えば、子どもにも生きるエネルギーはきっと伝わるはずである。

「生かされながら生きる＝受け身で生きる」と「より良くなろうと生きること」＝主体的に生きる」との間には、大きな隔りがある。

私は、教師として子どもたちには、「より良くなっていこう」という思い（生きる意欲）をもって、これからの人生を歩んでいってほしいと強く願っている。そして、その子どもたちが、その周りの人間にも、《その生きる意欲》を伝えられる存在に成長していってほしいとも願っている。

文部科学省でいうところの「生きる力」の根本は、生きていこうとするエネルギー

だと私は捉えている。さらに、そのエネルギーが、周りの人々に伝わり、自分の存在が、周りの人々に役立っているという実感にまで高められると、生きる意欲に転換されるのではないかと考える。(それが技化されたものが、生きる力)

幸いなことに私は教師という仕事をさせてもらっているため、これまでの考察を踏まえて、学校生活の中で、少しでも子どもに「生きるエネルギー」を伝播させていきたい。

4, どのようにしたら「生きるエネルギー」を伝え、育てることができ きるのか。

生きる意欲については、これまで、指導要領やその他の資料でも多く取り上げられているところである。ただ、今回は、私が実際にスリランカを訪れ感じたことから、授業の中で、生きるエネルギー・意欲に迫っていききたいと思う。

具体的な方法については、その後に計画を立てるとして、大まかなところから考えていききたいと思う。

今回の授業のねらいとしては、《スリランカの人々の生活や文化に触れ、世界には日本とは異なる考え方があることを理解する。また海外で活躍する日本人の生き方から、生きるエネルギーを感じ取り、これからの自分の生き方を考えることができる》こととする。

また、国際理解教育の第一歩として、①異文化理解②自国文化の見つめ直しができる授業を設計していききたいと考えている。

生きるエネルギーを、より良く生きていきたいという生きる意欲に転換させるためには、まず彼らの生きるエネルギーを五感を通して感じさせることが必要である(限界はあるが)。スリランカの町の様子や小学校での子どもたちの様子、生活困難な中でも力強く生きていこうとする津波被災地や貧困地区で暮らす、彼らの様子を伝えることは欠かせない。また、海外でその力を存分に発揮し、活躍する(と私たちには思える)日本人の存在を知り、彼らから話を実際に聴くことも効果的であろう。

そこで、まず導入では、ビデオや写真を効果的に利用して、日本の常識とは異なるスリランカの生活の様子を知り、興味を引き立たせる。次に、実際にスリランカの生活用品や食料品を五感を通して、体験することで、外国の生活の一端を味わう。(その後は、指導計画参照)